おわりに

長い講義にお付き合いいただき、ありがとうございました。本書を読み終えた今、皆さんの目に「病理学」はどのように映っているでしょうか。無機質な暗記の学問ではなく、これまでより少しでもリアリティと生命の躍動を感じられる学問として捉えていただけたなら、著者としてこれほど嬉しいことはありません。病気のことを勉強中の皆さんにとって、本書で身につけた「パソロジー思考」は、今後のあらゆる学習において確かな指針となるはずです。日々の症例や新たな疾患に出会うたび、ぜひ本書の視点を思い出してみてください。

もし本書を通じて病理学にさらなる興味を抱いたなら、ぜひ次のステップへ進んでみてください。まずは、世界中の医学生や研究者に愛読されている『ロビンス基礎病理学』（原著第11版、丸善出版）への挑戦をお勧めします。その情報量に圧倒されることもあるかもしれませんが、読み込むほどに皆さんをより高い視座へと導いてくれるでしょう。また、ありがたいことに、ある病理医インフルエンサーの方から「ロビンスの前に読むべき一冊」と評していただいた、拙著『核をつかむ！　病理学特講SEMINAR & ATLAS』（南江堂）も併せて紹介します。前半は会話体で病理学総論の要点を学び、後半のアトラスで豊富な写真に触れられる構成になっており、本書からのステップアップに最適です。さらに、実際の症例を

通じて病態を深く考察したい方には、医学雑誌『New England Journal of Medicine』（https://www.nejm.org/）の看板連載である「Case Records of the Massachusetts General Hospital」がお勧めです。世界最高峰のカンファレンスを追体験できるこのシリーズは、世界中の大学や病院の勉強会で定番の教材としても使われています。

本書の出版にあたり、株式会社羊土社編集部の冨塚達也氏、田頭みなみ氏をはじめとする皆さまには多大なるご尽力をいただきました。羊土社さんとのお仕事は、以前、臨床家向けの書籍を出版して以来となりますが、編集部の皆さんの凄まじい熱量と、細部に至るまで妥協のない鋭いご指摘（愛のある「ツッコミ」）には、今回も大いに叱咤激励されました。そのおかげで、最後まで楽しみながら執筆を完遂し、無事に上梓することができました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

最後に、本書を手にしてくださった皆さんの進む道が、豊かで実り多いものとなることを心より願っております。

２０２６年４月

清々しい春の光に、次への活力も感じながら

福嶋敬宜